

新潟市の「水と土」・美術教員の アートプロジェクトに対する意識

— 『水と土の芸術祭2009』教育プロジェクト
「みずっちパラダイス」のアンケート調査より—

The Consciousness about The Art Project of Art Teachers in Niigata City: From the Questionary Survey of The Education Project “Mizuttchi Paradise” in “Niigata Water and Land Art Festival 2009”

佐藤哲夫

Tetsuo SATO

I はじめに：問題意識と調査のねらい

「生きる力」を育む教育課題に答えうるものとして、「教育プロジェクトとしてのアートプロジェクト」に可能性を感じ、それを推進したいと思っている。2009年に実施された新潟市の水と土の芸術祭教育プロジェクト「みずっちパラダイス」は、その実現に向けての最初のステップであると考えられる。しかし、「実施を通して、こちらの思いや考えと、現場の教員のそれとの間に、食い違いがあることを感じた。多くの学校の参加を第一目標とした今回の場合、それはある程度計画準備段階から予想されていたことであり、それを考慮し、折り込んだ上での計画ではあった。しかし、予想とは異なることも多々あった。教育プロジェクトとして学校と連携したアートプロジェクトが重要であるとの立場から、このことを看過することはできない。実のある連携のためには、目的や意図についての意識の共有が不可欠である。参加された学校の教員は今回のプロジェクトをどう受けとめ何を感じたのだろうかということを知りたいと考えた。

従って、意識調査といっても、その目的は、「みずっちパラダイス」の成果と課題を、教員や学校の側面から検証するというにある。そして、この「みずっちパラダイス」には、重なり合いつつも三つの別な意味が想定されている。一つは、「実際に2009年に実施された芸術祭イベントとしての「みずっちパラダイス」である。二つ目は、アートプロジェクトとしてのそれである。三つ目は、美術教育プロジェクトとしてのそれである。これらは「みずっちパラダイス」の企画立案段階から、意図あるいは意識されていたものであり、成果と課題を明らかにするということは、これらの側面から評価するということである。

次章で述べるように、アートプロジェクトは美術教育に新しい可能性を垣間見させてくれるものである。これまでの学校の美術教育の幾つかの重要な問題への有効な解決の糸口がある。従って、アートプロジェクトに現場の教育者として関心を持ったり、主体的に関わることは価値のあることだと考える。

本研究は、このような立場から見られた教員の意識調査であり、「みずっちパラダイス」の成果と課題である。

II 教育プロジェクトとしてのアートプロジェクトの必要性

近年アートプロジェクトが各地で行われるようになった。新潟大学教育学部でも、2001年からこれまで「内野 DE アート」あるいは「西区 DE アート」を実施して来た。これらには子どもが参加できる企画も多く含まれている。選択美術や総合学習の時間、部活動としてなどケースバイケースで、地域の学校に協力して頂き、学生が何回も学校に出向き、児童生徒と展示作品の制作を行って来た。また、地域の子どもを対象にした自由参加の造形ワークショップも数多く実施してきた。それに「西区 DE アート」の企画作品自体も、子どもも楽しめるものである。このように、これまでの「西区 DE アート」にも教育的プロジェクトとしての性格は具わっていた。しかし、協力してくれた学校や教員の関わり方についていえば、総じて受動的なものであった。作品制作のための時間の捻出と、その時間の制作の見守りということが多かった。設備や準備物、子どもへの指示などで手助けしてくれることはあっても、学生の活動そのものには距離を置き、積極的に関与するということはほとんどなかった。「西区 DE アート」の意義を認めないということではないが、それは、あくまでも学校外の大学側の活動であって、学校や自身の教員としての本務とは無関係であるという意識だったためだと思われる。

一方、学生の方も、自分たちで立てた子どものための企画を、自分たちで実施することに特に疑問に感じることにはなかったように思う。

これらのことからいえることは、これまで実施してきた「西区 DE アート」は、参加した子どもに対して教育的効果はあったとしても、教員や学校の美術教育そのものに対する直接的効果はほとんどなかったということである。そして、「西区 DE アート」に限らず、各地で行われている大小さまざまなアートプロジェクトについても、長野県の中学教諭、中平千尋氏がはじめた「とがびアート・プロジェクト」など一部の例外を除いて、ほぼ同様であると思われる。また、教育者になるための経験を積み力量の形成をはかるという、学生の学習の観点からみても、教員と濃密な交わりがないことはマイナスである。

アートプロジェクトには、今日の美術教育が直面している課題にとっての示唆に富む特徴や内容が多い。たとえば、表現の宛先や機能ということである。通常の授業での児童生徒の表現が、いったい誰に向かって何を伝えようとしているのかを考えると、非常に不自然であることに思い至る。同じクラスの子や先生に対して表現するのではなく、同じ地域で暮らしている知り合いや、見知らぬ大人や同世代、異世代の多くの子どもに向けて表現がなされ、見てもらおうとすることが大切であり、そこから様々な声をもらうことが励みになるのではないだろうか。また、目指す目的の達成のために、クラスで力を合わせたり、いろいろな人のアドバイスや助力を請うたり、現実の中で試行し行動することが、今日の子どもをして成長せしめるのではないだろうか。

筆者は、美術教育は、学校の授業の中だけで行われるべきであるとか、逆に、アートプロジェクトが、図工・美術の授業にとって代わるべきだという意見には立たない。学校と学校の外でのアートプロジェクトなどの活動が、補完しあいながら美術教育を推進する必要があると考える。しかし、そうであっても、美術教育に携わる教員は、子ども一人ひとりに施される美術教育の全体にたいして、なにがしか責任感や義務感を持つべきだと考える。子どもの経験に対して総体としての視点を持つことなく、学校の中だけの定められた業務として授業をとらえれば、学校における教科の意味や教員の存在意義も次第に失われていくことが危惧される。美術教育に関して今日の学校に求められるのは、アートプロジェクトなど学校の外の活動を通して人と積極的に関わり、お互いに刺激し合い、連携を深めることで、授業や美術教育の考え方を今日的な課題に対応できるものへと変えていくことである。

III 「みずっちパラダイス」の実施形態と参加教員の関わり方

「みずっちパラダイス」（2009年8月15日～23日）は、「水と」の芸術祭2009の実行委員会の直轄事業として位置づけられた教育プロジェクト企画として実施されたものである。筆者は、芸術祭の実施が公式に決定される前から、子どもが参加できる芸術祭の必要を訴えて提案していたが、教育プロジェクトの代表としてこの企画の立ち上げと実施に関わった。

芸術祭は、第一に市民のためのものであり、そこには子ども対象のプログラムが不可欠である。しかもそれは単に芸術祭の鑑賞者やイベントの添え物としての関わりではなく表現者の側として関わるのが望ましい。この機会に、日頃美術教育に携わっている新潟市の学校の教員が積極的にこれに寄与することが出来れば、市民や子を持つ親に、自分たちの存在や美術教育の必要性を広くアピールすることに繋がる。今日、美術教育は学校教育全体の中で、どんどん片隅に追いやられていっている危機的現実があるからである。

こうした考えに基づき、小学校と中学校の教員そして大学の教員数名で、2008年の夏頃から毎月1、2回、非公式の会合を持ち、参加と実施の形態について意見交換を重ねた。しかし、議論はなかなか前に進まなかった。小学校と中学校、大学ではそれぞれ置かれている条件や環境が異なり、会合の参加者の意識や考えも大きく異なることが明らかになった。

結局、中学校に関しては主力の部分は、新潟市中学校教育研究会（中教研）を母体に、独自に鳥屋野湯で展開することになった。積極参加の意思を持つ中教研の中核メンバーのリーダーシップにそって参加校が募られ実施された。大学は天寿園の方を担当し、幼稚園、小学校、中学校、高校、特別支援学校が参加した。こちらは、先に校長会にお願いし、それぞれの校種ごとに現実的な方法で割り振ってもらった。この上意下達的な方法を今回とったのは、初めて経験するものに、十分な説明の機会もないまま参加の意思を問うても色よい返事は期待薄だったからである。それよりもまず重要なことは、今回はできるだけ多くの学校に参加してもらうことであり、その経験を基に、次の機会に、自主的な参加校と参加者によるプロジェクトを口指したほうが良いと考えたからである。

参加校と学生発案の企画の割り振りが決定した後は、制作のためのマニュアルと加工した材料などを各校に配達し、作品づくりを行ってもらった。こうしたお仕着せのやり方もいうまでもなく理想とするところではない。しかし、ここでも現場の状況から、今回は制作の容易さと、比較的短時間で実施可能という条件を優先した。完成したものの回収、天寿園での設置、会期終了後の作品の返却も、大学側で、市職員にも手伝ってもらいながら行い、現場側の負担の軽減に配慮した。

因みに、このプロジェクトに関わった学生は実質約20名である。これらの学生、特にその中でも企画の責任を負った学生は、大変な時間とエネルギーを費やした。本来なら、参加校の子どもや教員と交流しながら制作にも関わり合いたいところであるが、到底不可能であった。それでも、「ほくらは龍のスタイリスト」という企画に参加した幼稚園と美術専任のいない中学校数校については、大学から出向いて制作活動を補助した。

この章を終えるに当たって、天寿園（大学）プランを構想することにおいて、考慮したポイントを列挙しておく。

- 1 何よりも子どもが楽しめることを第一に考慮した作品の企画や展示、会期中の運営を行う。（これがなければ子ども主体のアートプロジェクトにはなり得ない。）
- 2 子どもだけでなく保護者も一緒に、そして多くの一般の人が、気軽に見に来てもらえ、リラックスして鑑賞し造形活動を楽しんでもらえること。（場所、時期、駐車場、造形ワークショップ、スタンプラリー、チラシの配布など）
- 3 自分たちが学校で作った作品が、他の学校の子どもの作品と合わさり、作ったときとはまた別な見え方がして、水と上の芸術祭のプロジェクトに参加したという実感が持てるように、一カ所に集約した展示を行う。

われわれの不安をよそに、こうしたことが功を奏し、期間中の9日間で4,200人の人が訪れてくれた。会場の受付で、来場者にアンケートの回答をお願いしたが、楽しめた、またやって欲しいなど、好意的な意見が多数をしめ、イベントとして非常に高い評価が得られた。

IV 調査方法

教員意識のアンケート調査は、「みずっちパラダイス」に参加した学校79校の担当教員を対象に、2010年11月に実施した。参加学校の教員の思いを知るためには、一人一人に直接会って、十分時間をかけて話を聞くのが最善に見える。しかし、今回は参加校が多く困難であるし、実施側の者に面と向かって、ありのまま

の思いを口に出せるかという疑念もある。そのため、代わりに無記名でアンケートに答えてもらうことにした。そしてアンケートの形式は、統計処理が困難になることを覚悟の上で、自由記述形式で回答してもらった。

【アンケート名】

教育プロジェクト「みずっちパラダイス」アンケート調査票

【内容説明】

このアンケートは、ご参加頂きました『水と土の芸術祭2009』教育プロジェクト「みずっちパラダイス」の成果と課題を明らかにするために行われるもので、参加学校の担当の先生方を対象とした無記名の意識調査です。

【質問項目】

1. 参加したのはどちらですか。
 - a) 「天寿園」（新潟大学）プラン b) 「鳥屋野湯」（中教研）プラン
2. 校種は何ですか。
 - a) 幼稚園 b) 小学校 c) 中学校 d) 高等学校 e) 特別支援学校
3. 今回担当されて「みずっちパラダイス」についてどのような意見、感想を持ちましたか。

どのような部分、方向、観点からのものでも結構です。3つ以上あげてください。

また、それらがプラス（+）のことか、マイナス（-）のことか、どちらともいえない（△）かの判断を、符号で示してください。
4. 現行の美術教育についての考えをお聞きます。現在の学校（園）での図工、美術あるいは造形表現活動などについて、どのような意見、思いをお持ちでしょうか。

どのような方向、観点からのものでも結構です。3つ以上あげてください。

また、+、-、△の判断を、符号で示してください。
5. 今後、「みずっちパラダイス」など、美術教育としてのアートプロジェクトを実施することについて、主体的参加の意向、実施自体の賛否、その形態、方向、内容、形式などの提案等をお聞かせください。

どのような方向、観点からでも結構です。ご意見を3つ以上お書きください。

調査票の説明のとおり、アンケートは「みずっちパラダイス」の成果と課題を明らかにするために行われたものであるが、その「みずっちパラダイス」には複合的な意味が想定されている。現実には生じた一連の出来事としての意味、アートプロジェクトとしての意味、「水と土の芸術祭」の子ども向けプログラムとしての意味、教育活動としての意味などである。今回学校や教員がどのような意識で「みずっちパラダイス」をとらえ、関わっていたのかを調べることで、目指す「教育プロジェクトとしてのアートプロジェクト」に向けての学校側の成果と課題を明らかにしたいというねらいである。

今回の「みずっちパラダイス」を評価するためには多視点が必要であるが、新しい美術教育の推進という

ねらいからは、教員の意識内容に照らしての評価がきわめて重要である。

次に、アンケート調査の形式をこのような、自由記述による定性的な質的調査法とした理由であるが、次のようになる。

1. 定量的な方法をとった場合、質問の項目をあらかじめ設定することになるが、不応なく評価軸がすでに設定されているかのように見えてしまうことになる。
2. 意識内容や構造化された意識空間は、得られた自由記述の中から、項目を事後的に切り出すことで、ある程度は定量化できる。
3. 全体の傾向や意識の分布を調べると同時に、参加教員一人一人の気持ちや思いを言葉のニュアンスや言い回しを通して感じ取りたい。

自由記述形式の三つの質問項目のねらいは、次のようになる。

「質問3」は、今回参加した対象者は、「みずっちパラダイス」を何であると理解していたのか、また、どのように評価したのかを見る質問である。

「質問4」は、美術教育の現状に対して、日頃どのように評価し、どのような問題意識を感じているのかを調べる質問である。この質問を入れたのは、「質問3」と合わせて次の質問5の回答へと繋がる道筋を用意したいと思ったからである。

質問5は、「美術教育としてのアートプロジェクト」という目指す目的に、どのような理解があり、どれくらいの当事者的興味があるかということ調べる質問である。

そして、三問とも、一つ以上の回答を求めた。理由は、ステレオタイプな習慣的反射的反應を超えて、本来の自分の思いや深層の考えを浮かび上がらせるのに必要なだけの、内省の時間を確保するためである。

また、「質問3」と「質問4」の回答には、それぞれ価値判断を示す符号（＋、－、△）を一つ一つの回答ごとに付けてもらった。これは、定量的なとらえ方を付加するためということと、回答の記述の真意を理解する助けになると考えたからである。

V 結果と解釈

以下、アンケートの各項目の結果と解釈を、図表を提示しそれを説明するという形で述べる。

表1 アンケート回答校数(率)

	天寿園(新潟大学)プラン		鳥屋野潟(中教研)プラン	
	回答校(参加校)			
幼稚園	8(10)	80%		
小学校	23(28)	82%		
中学校	5(8)	63%	13(27)	48%
高等学校	0(3)	0%		
特別支援学校	2(4)	50%		

回答を得たのは、アンケート送付先79校中、50校(63%)であった。参加プラン、校種別内訳を表1に示す。数の多い3校種についてのみ見ると、天寿園プランの中核となる幼稚園、小学校については、80%、82%と高い回答率である。鳥屋野潟プランの中学校においては48%と低かった。この数字は、後で触れるが、偶然ではない可能性もある。

「質問3」の「みずっちパラダイス」についての意見感想では、ほとんどが自分が担当した単体企画に関するものであった。「みずっちパラダイス」全体に関するもの、「水と土の芸術祭」に関するものはわずかであった。「芸術祭」については、直接問うたものではないので当然であるが、「みずっちパラダイス」全体に関する感想や意見が少なかったことは、意識(関心)がどこに向けられているかを示している。さら

に校種ごとに見ていくとはっきりした特徴が表れる。携わった単体の企画への集中が見られるのは幼稚園と小学校であり、中学校と特別支援学校は、全体への言及が多かった。また、担当した自分に関する言及も多かった。

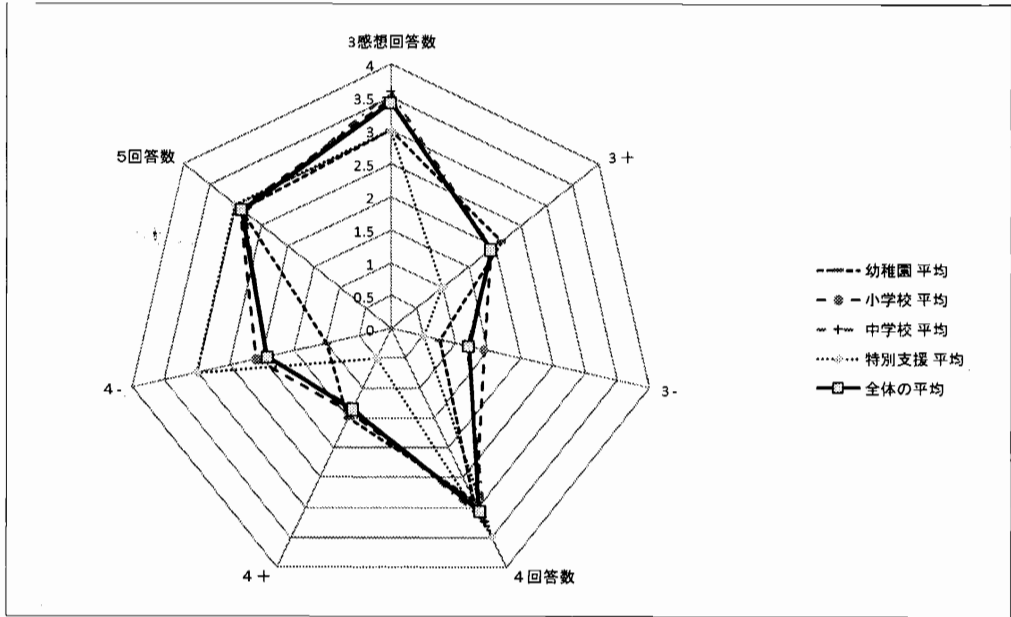


図1 質問3, 4, 5回答数と評価

図1中の数字は質問の番号である。「質問3：感想」[質問4：美教]には回答に符号を付けてもらった。グラフの見方としては、「質問3」の設問に対しては、全体で平均3.5個の回答が寄せられ、そのうち+の事項と評価されたものは、平均2個、+のことだと評価されたものは、平均1.3個、従って△や空欄は、平均0.2個である、となる。3個以上の回答を求めたので、「質問3, 4, 5」のそれぞれの総回答数平均を見ると、やはり3個あたりに集中しているが、中では今回の意識調査の中心である「質問3：感想」が、3.4個と一番多かった。そして、評価に関しては、「質問3」では、+に傾いていて、「質問4：美教」では一への傾きがあることがわかった。学校の図工美術教育の現状に対する負の問題意識と今回のアートプロジェクトに対する好評価という傾向が確認される。

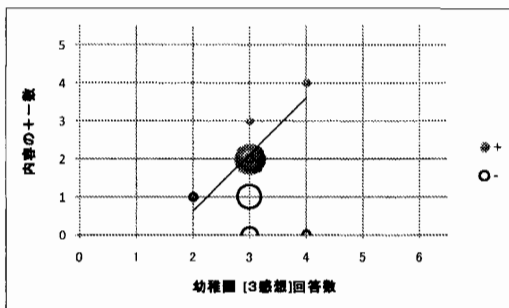


図2 「質問3：感想」回答分布 幼稚園

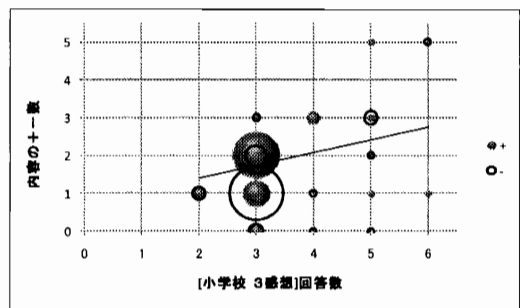


図3 小学校

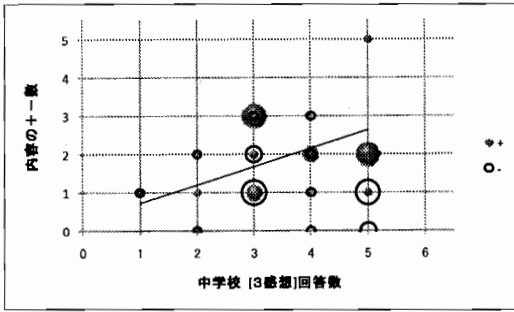


図4 中学校

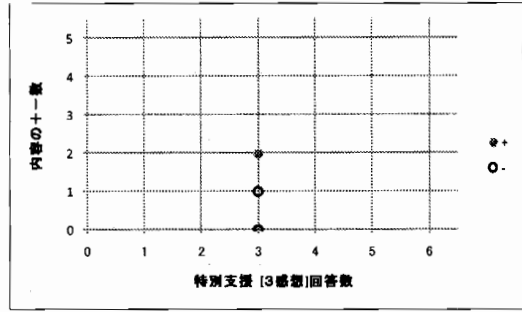


図5 特別支援学校

「質問3：感想」回答分布のバブル図(図2, 3, 4, 5)。横軸は「質問3」の項目に対する回答の数、縦軸は、そのなかで回答者によって評価され付けられた符号(+(塗りつぶし円)と-(中抜き円))のそれぞれの数である。それぞれの円の大きさ(径)は、その座標に該当する件数を表している。図みに依頼では3個以上の回答を求めた。このグラフから分かるのは、「質問3」への回答の分布パターンである。これは図1のレーダーチャートからも見て取ることができるが、どの校種についても共通しているのは、今回の「みずっちパラダイス」に関しては、+評価が-評価に数の上で勝っているということである。また、分布の傾向としては「特別支援学校」「幼稚園」「小学校」「中学校」の順に分散傾向が大きくなっていることがわかる。中学校では4個、5個と回答してくれた所も多い。これは教員が参加した企画に密に関わったことの表れであると解釈される。今回中学校は、大学提示プランとは別に、新潟市の中教研(新潟市中学校教育研究協議会美術部会)の幹部のリーダーシップで、自分たち独自で美術部向けの企画を立て実施し、参加教員の負担も関与も大きかった。

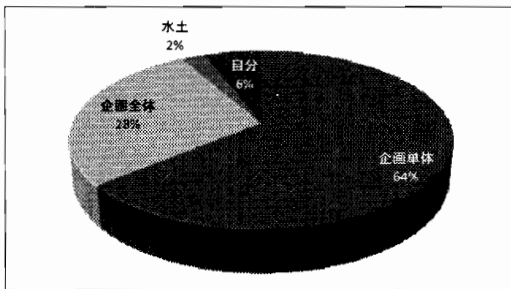


図6 「質問3：感想」対象 全体

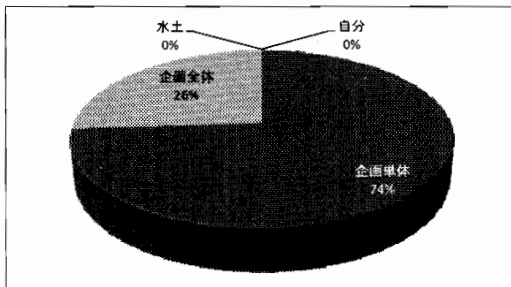


図7 「質問3：感想」対象 幼稚園

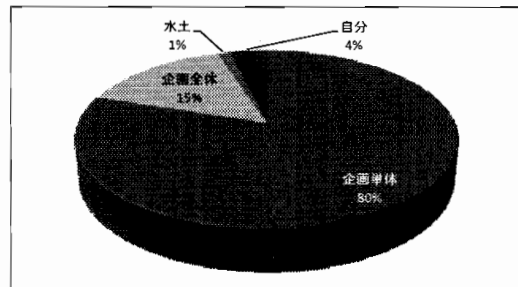


図8 「質問3：感想」対象 小学校

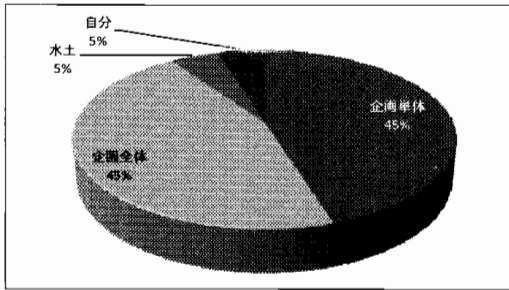


図9 [質問3：感想] 対象 中学校

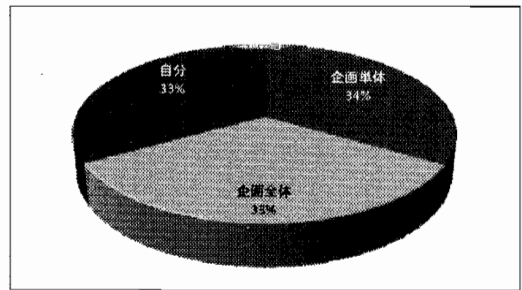


図10 問3：感想 対象 特別支援学校

「質問3：感想」対象の円グラフ（図6，7，8，9，10）。回答の中身を、それが何についての感想や意見なのかという観点から、4つに分類したグラフである。「企画単体」は、参加した個別企画そのものについてのもの、「企画全体」は、今回の「水と土の芸術祭」教育プロジェクト「みずっちパラダイス」の全体やそれを構成した二つのパート「天寿園プラン」と「鳥屋野潟プラン」それぞれの全体に関わるもの、「水士」は「水と土の芸術祭」全体に関するもの、「自分」というのは、それ以外の自分を対象とした感想である。

グラフをみて分かることは、「中学校」と「特別支援学校」では「企画単体」と「企画全体」についての感想の割合が拮抗しているが、幼稚園や小学校ではほとんどが自分が関わった企画のみについての感想だった点である。特に参加校数が最も多い小学校では、「企画単体」についての感想は、「企画全体」についてのものの5倍以上である。このことは、大学がイニシアチブをとった「天寿園プラン」では、全体企画の立案に個々の学校は関わっておらず、担当校や担当企画も半ば分担が割り当てられる形だったため、「企画全体」のねらいについての理解や意識が希薄だったことの表れだと思われる。

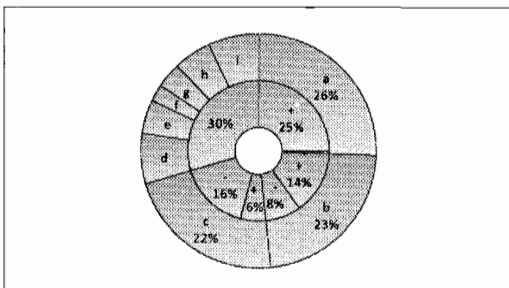


図11 [質問3：感想] 内容 全体

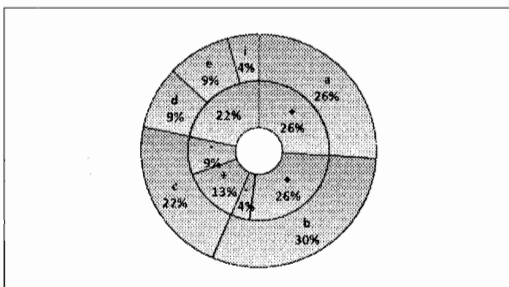


図12 [質問3：感想] 内容 幼稚園

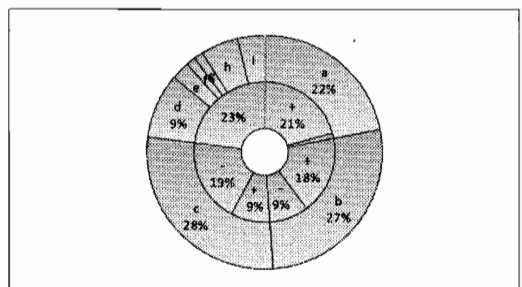


図13 [質問3：感想] 内容 小学校

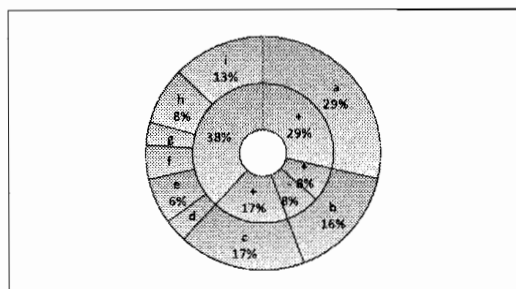


図14 [質問3：感想] 内容 中学校

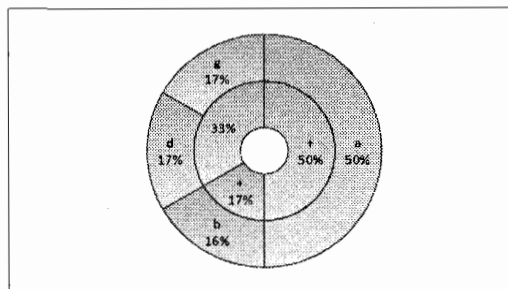


図15 [質問3：感想] 内容 特別支援学校

〔質問3：感想〕の内容についての2円グラフ(図11, 12, 13, 14, 15)。回答を読み、そこに書かれた様々な感想や意見を、比較的近い、共通性のあるもの同士でグルーピングした。その結果9つにカテゴリー化された。グラフの外側の円は、それらのカテゴリーの内訳である。内側の円は、グループ全体の中で占める割合が高かった a, b, c のカテゴリーについては、その中の十と一の分布状況である。符号が無い部分はカテゴリーの d 以下の合計の全体に対する割合である。

9つのカテゴリーは次のようなものである。

- a：子どもの取り組みや満足(意欲, 意識・理解, 感想, 愛着, (家族と) 見る楽しみ, 参加する楽しみ, 心のつながり, 交流, など。)
- b：スケジューリング(時間, 周知が実際, など。)
- c：参加の企画内容(難易度, 時間が食われた, 共同(グループ)制作, 制作のしやすさ, 美しさ, 教育効果, 単体の展示法を含む形態, など。)
- d：大学など主催者側(負担感, 大学でやって欲しかった, 材料, 指示, 連絡打ち合わせ, 交通, 費用, 展示期間, 要求水準が不明, など。)
- e：全体と全体の中での展示形態(きれいさ, 見やすさ, 期間, 時期, など。)
- f：参加企画内容以外の教育的意義(ワークショップ体験, 経験, など)
- g：(一般)人への意義・意味, アピール, うけ, など。
- h：周りの教員(人)や自分の意識。
- i：組織論, 全体手法, 広報, 参加。

カテゴリーとするには、雑然として整理されていない印象を与えるかもしれない。前の「質問3：感想」対象の円グラフでの「企画単体」と、このカテゴリー「c：参加の企画内容」は、同じ名前でも特に紛らわしいと思う。回答として挙げられた感想や意見が何を念頭に置きつつ発せられたものと考えられるかということが前者「対象」としての「企画単体」であり、その中でたとえば、「子どもが楽しんで(その企画の)制作に取り組めた」ということなら「内容」としては「a：子どもの取り組みや満足」になるし、「制作の難易度が低すぎた」というのであれば「c：参加の企画内容」に含まれるということになる。しかし判断に迷うことも多く、複数のカテゴリーに関わるコメントもあった。それらに関しては、最も優勢であると思われる一つのカテゴリーに振り分けた。

集計の結果は、「特別支援学校」以外の校種では、a, b, c で大半を占めた。「特別支援学校」は、「c：参加の企画内容」が無く、「d：大学など主催者側」「g：(一般)人への意義, アピール」も割合としては多かった。

この「g」は、今回のプロジェクトのねらいの一つである。子どもの造形活動の良さと重要性を広く市民に認知してもらうことが、美術教育推進の前提条件だからである。特別支援教育では造形活動に限らず、一般の人の理解を得ることの必要性が高いことが影響しているのかもしれない。一方、一般校では、「質問4」の分析で見ると、問題意識がないわけではないが、今回のプロジェクトに関しては、あまり関心がなかったといえる。

またそれぞれの内容の回答者の評価をみると「a：子どもの取り組みや満足」に関しては、どの校種でも共通で、ほとんどすべての人が＋と評価した。制作に携わった子どもに直接聞いた感想ではないとはいえ、このことから、今回の教育プロジェクトでもっとも重視した、「子どもが楽しいと思える企画」は、参加教員にもよく理解してもらえ、成功であったといえそうである。「b：スケジュール」に関しては、小学校と中学校では、＋と－が拮抗した。このことは、幼稚園や特別支援学校に比して、小学校と中学校は、教育計画に融通が利かず、余裕もないことの反映ではないかと推測される。「c：参加の企画内容」に関しては、小学校の－評価の多さと、幼稚園、中学校の＋評価の多さが、著しい対照を示した。この結果の理由は、次のようなことであると思われる。中学校では、自分たちで立てて実施した企画が中心だったため＋の評価となった。幼稚園は、小学校と同様に、学生発案の大学からのお仕着せ企画ではあったが、学生が園での制作にも深く関わった企画があり＋評価が多かった。小学校は、お仕着せの企画を届けられた材料で大体決められたように制作しなければならなかったことから、受け身の参加となり、企画に対してはネガティブな側面に目がいき、－評価が多くなった。

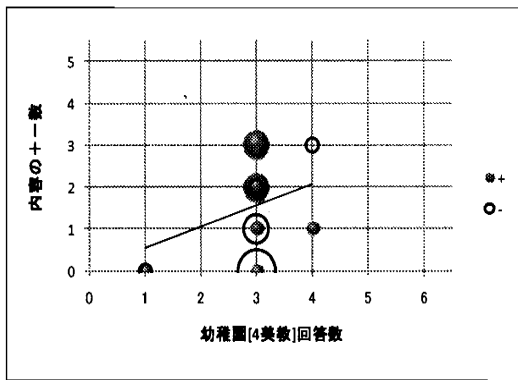


図16 [質問3：感想] 回答分布 幼稚園

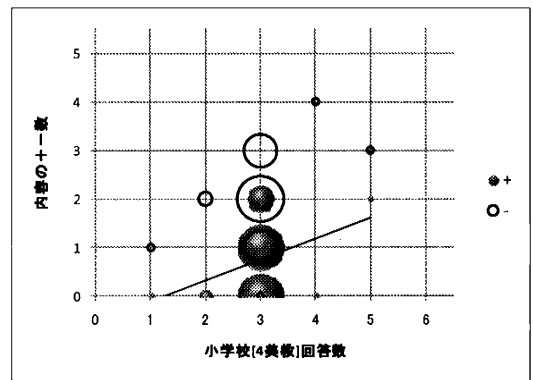


図17 小学校

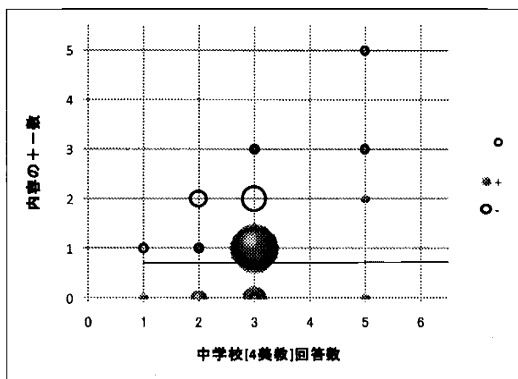


図18 中学校

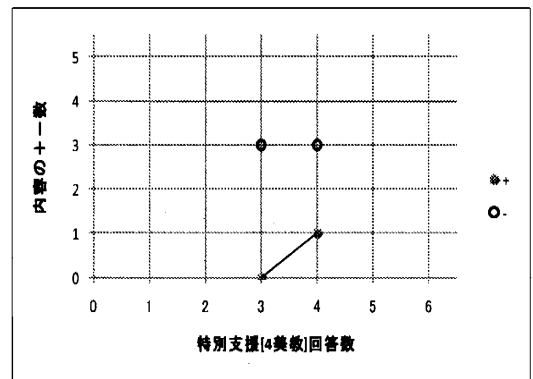


図19 特別支援学校

「質問4：美教」回答分布のバブル図（図16, 17, 18, 19）。バブル図自体の見方は「質問3：感想」の回答分布図と同様である。ここからわかることは、「幼稚園」以外は、造形活動や教育に関して－評価が＋評価よりも多いということである。また、「中学校」では5つとか、8つとか回答してくれた人もいた。「小学校」「中学校」では、今の学校での「図」・美術を巡っては、いろいろ問題を感じていることがうかがわれる。

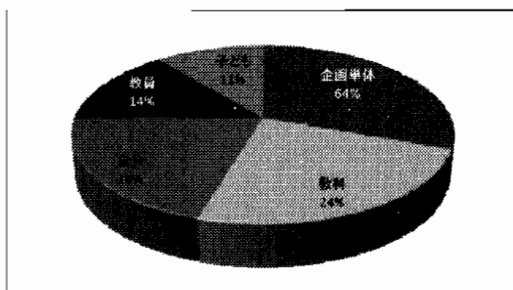


図20 [質問4：美教] 対象 全体

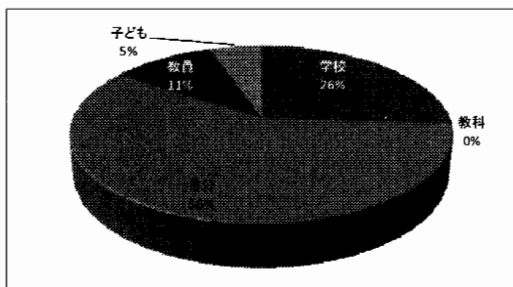


図21 [質問4：美教] 対象 幼稚園

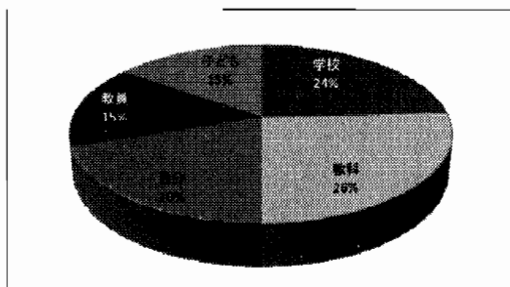


図22 [質問4：美教] 対象 小学校

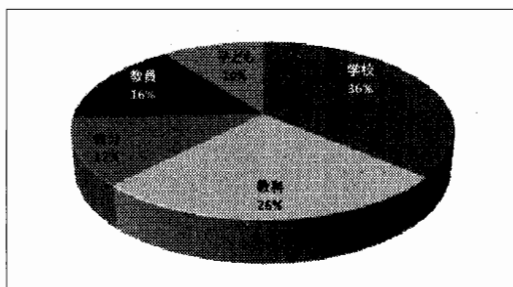


図23 [質問4：美教] 対象 中学校

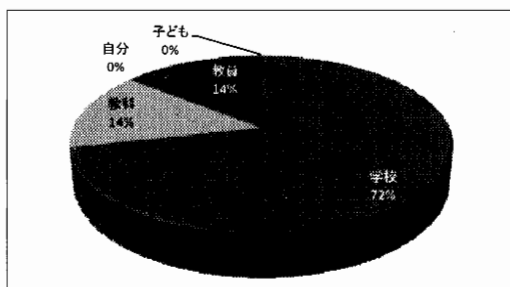


図24 [質問4：美教] 対象 特別支援学校

[質問4：美教] 対象の円グラフ (図20, 21, 22, 23, 24)。「質問4：美教」の回答の「内容」に関しては、時間が少なすぎるなど共通するものも多かったが、多様であった。それは回答の「対象」にも反映し、教科そのもの以外で、「学校」、「教員」、「子ども」、「自分」との関係で美術教育の現状についての回答があった。前に述べたように、今の図工・美術についての質問を入れたのは、今後の「教育プロジェクトとしてのアートプロジェクト」の動機へと繋がる道筋を用意したいと思ったからであるが、両者が関連付けられた回答は、こちらの期待ほど多くはなかった。回答の代表的なものをまとめた一覧を、最後に挙げておく。

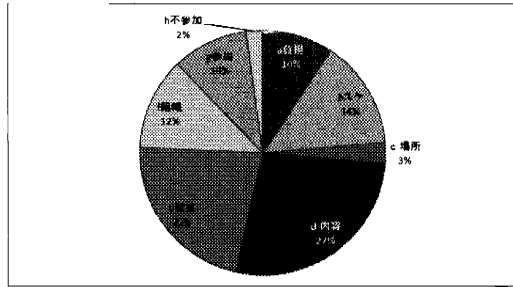


図25 【質問5：今後】内容 全体

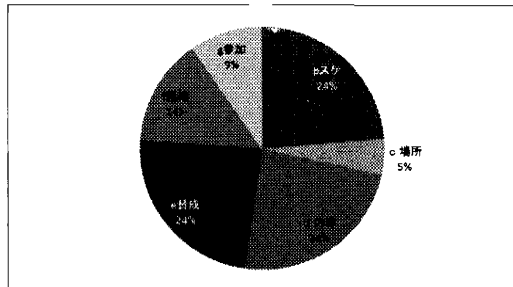


図26 【質問5：今後】内容 幼稚園

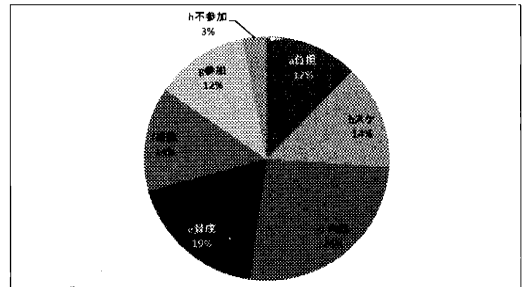


図27 【質問5：今後】内容 小学校

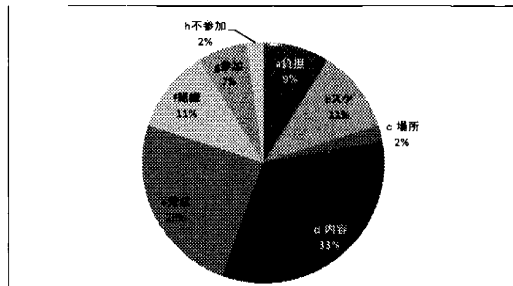


図28 【質問5：今後】内容 中学校

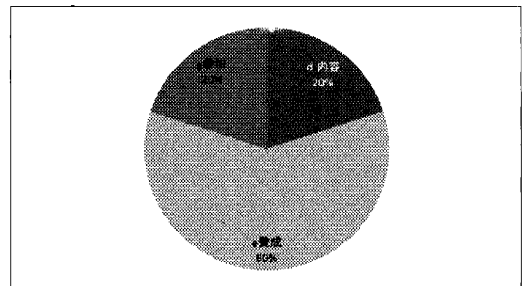


図29 【質問5：今後】内容 特別支援学校

「質問5：今後」内容の円グラフ(図25, 26, 27, 28, 29)。「質問3：感想」内容と同じく、回答の内容を読み取り、そこからグルーピングしたものである。ただし、この質問項目には十の評価は求めているので、一門のグラフになっている。

- a：負担(学校の実情、やらされ感、簡単にできるもの、短時間、大学生も一緒につくる)
- b：スケジュールリング(年間計画、学期末や行事と重なる)
- c：場所(選びたい)
- d：内容(形態、作家とのコラボ、(内容の)形式・システム)
- e：賛成(今回のやり方が良い、参考になった、多くの人が見る)
- f：組織(運営)
- g：参加の意向
- h：不参加の意向

「質問5」に関しては、さまざまな見地からの意見が寄せられたが、グラフに見られるような内容が多かった。個々の具体的な回答一覧を、最後に挙げておく。

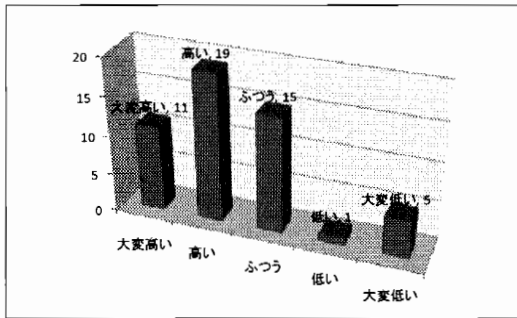


図30 参加意欲 (全体)

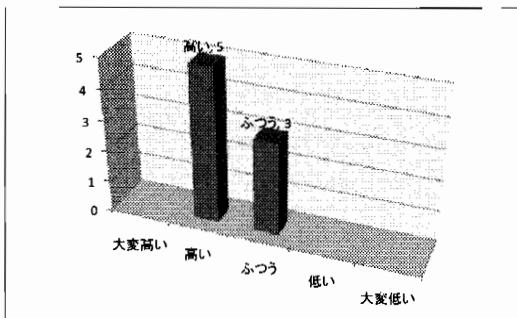


図31 参加意欲 (幼稚園)

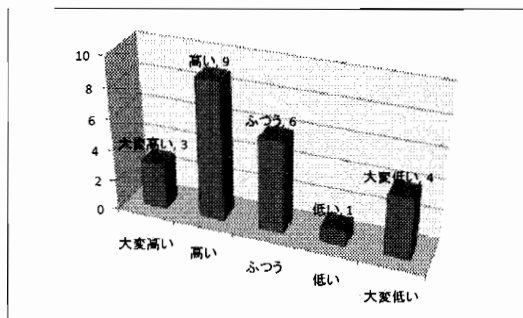


図32 参加意欲 (小学校)

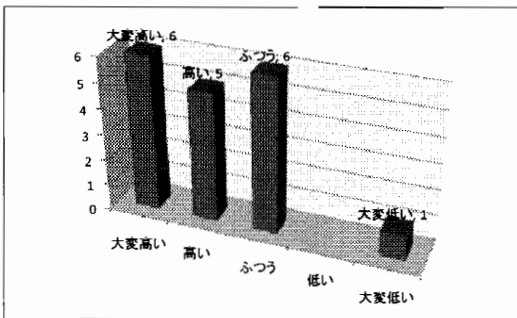


図33 参加意欲 (中学校)

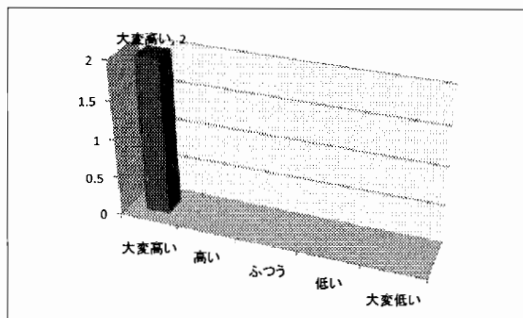


図34 参加意欲 (特別支援学校)

「参加意欲」の棒グラフ(図30, 31, 32, 33, 34)。アンケートの「質問3」と「質問5」を中心に、そこに記載された文章の内容、回答としてあげた項目数、そして「質問3」に関しては付された十の符号、間接的には「質問4」の回答も加味しながら、総合的に筆者の主観で、一件一件を5段階で評価したものの集計である。したがって恣意性が紛れ込むことは避けられない。それでも、大まかな傾向は捉えられていると考える。

グラフの横軸で、「大変低い」「低い」というのは、それぞれ「参加したくない」「できれば参加したくない」意向や気持ちを表している。「ふつう」というのは「参加」に関して意味をなさない言葉であるが、「高くも低くもない」あるいは「態度保留」という意味に解してもらいたい。また縦軸は件数である。

(全体)を見ると、アートプロジェクトへの参加意欲は高いということがわかる。また、「態度保留」

(ふつう)は、多いが、参加したくないというのは少ない。アンケートの依頼者(筆者)が、「みずっちパラダイス」の代表でアートプロジェクトの推進者側であることから来る気兼ねが含まれているとしても、全般に参加意欲は高いということがいえる。

「校種別」で内訳を見ると、「中学校」と「特別支援学校」に「大変高い」が多い。「幼稚園」「特別支援」と「小学校」は対照的で、幼稚園は「高い」と「ふつう」のみだが、「小学校」は散らばっている。そしてはっきり「参加したくない」意向をしめしたところが校種最多の4件で全体の大半であった。(小学校も全体としての参加意欲は高い。)この結果に関しては、いくつかの要因の影響が考えられる。「小学校」は、件数(参加校数)が一番多く、また、参加企画の種類も多かった事である。今回参加の企画名は匿名性の保証のために記入してもらわなかったため、各企画と参加意欲の相関はわからないが、今回参加した企画での体験が、今後の参加意欲に影響するのは想像されるところである。一方「幼稚園」は、幼稚園のみを対象とした「龍のスタイリスト」の企画が含まれていて、これに関しては大学生が出かけていって準備や制作を手厚くフォローした。また、企画も2つのみであり、これらのことが、散らばりが少ない一つの要因と思われる。

VI まとめ

目的である「美術教育としてのアートプロジェクト」を達成するためには、理想的なプランの実施のための様々な条件を整えて行かなければならない。中でも鍵となるのが、参加学校と教員である。ここが、真に主体的な意識を持ち、自らが携わっている美術教育の課題解決のための有望な手段として見なすようになる必要がある。今回の調査により、現状ではまだ、目的実施の条件が十分には整っていないことがわかった。しかしながら、同時に希望が持てることも明らかになった。総体としては「みずっちパラダイス」のようなアートプロジェクトに賛成である、参加したいという前向きな意見が否定的な意見よりもはっきり多かったからである。もしも、次の機会にアートプロジェクトに参加するということになり、今度は自らがイニシアチブを取ることになったとき、それでも肯定的な姿勢を保持できるかどうか、そこは未知数であるにしてもである。

実は今回実施したアンケート自体にも、今回の「みずっちパラダイス」と同じ役割が込められていた。すなわち、美術教育に携わる多くの現場教員に、「美術教育としてのアートプロジェクト」を意識してもらい、そこに主体的に関与していく契機になると考えたからである。引き続き、様々な機会を捉えて、教育アートプロジェクトを追求していきたい。

附 録

【質問4：美教】の回答一覧(代表的なもの)

「幼稚園」

- 題材が豊富になってきた。造形経験をたくさん味わえる。
子どもたちに達成感や感動があり、作品を大切に作る。
- × 衣類が汚れるため、保護者も子どもも嫌がる。
子どもの表現がパターン化してくる。個性がでない。
展覧会などでは、できるだけ子どもたちの差がでないように指導してしまう。
- △ 子どもの苦手意識への克服の対応の仕方に悩む。
- 他 遊びそのものが美術とつながったものと考えている。▶子どもたちにとって大切なもの。

「小学校」

- 題材が豊富になってきた。
図工の専門でない教員も意欲的に文化祭・コンクールなどに関わろうとする。関心を持っている。
子どもの好きな教科であるため、意欲的に取り組む。
- × 時間数・予算が少ないために、いろんな題材を扱うことができない。

キット教材に頼ってしまう。→他の題材だと指導の仕方がわからない。

子どもに技術・発想がない。

他の教員や保護者に美術が軽視される（主要教科と比較して）。

見た日重視になっている。

作品の保管場所に困る。→作品を持って帰ると家で捨てられる。

鑑賞の授業が十分にできない。

△ 題材研究が間に合わずに、いい授業ができない。

他 学習指導要領と現場、教員同士、教員と保護者のそれぞれの間からねらいにずれがある。

[中学校]

○ 子どもの好きな教科であるため、意欲的に取り組む。

美術館や芸術家と連携した鑑賞授業ができる。

× 時間数が少ないため、創造・鑑賞活動が十分にできない。→子どもに技術・発想がない（身に付かない）。

他教科の教員の理解や協力が無い。→美術が軽視されている。

美術専科の教員がいないため（非常勤の美術教師ばかりで）大変。特に文化祭の時など。

題材研究が足りない。

△ 地域・美術館の協力が無い。

指導者に左右される。→見た目にこだわり、子どもの個性よりも教員の力がかかりすぎる作品も多くある。

子どもの努力、意欲が年々減ってきている。

短時間題材ばかり増える。もっと深めながら学習したい。

他 教育課程を見直すべき。→学習指導要領と現場の差がある。家庭科・技術科と美術の内容が混ざっている。

アートプロジェクトやアートイベントなどと連携したらいい経験になるが、授業でどういう位置におけばいいかわからない。

大学と連携すると新素材は題材を知ることができる。→これから連携していきたい。

評価や身につけなければいけない学力が明確ではない。

[特別支援学校]

○ 造形経験を豊富にできる。

× 時間数がない。

教科として意識が低い。→研究されにくい。

[質問5：今後]の回答一覧

- 1 学校の図工の年間計画に位置づくものであれば、子どものいい発表の場になり、励みになる。そのようにできれば、作品に対する愛着も増すものと考えます。
- 2 学校現場のことも考えていただければ、可能な範囲で参加できる。
- 3 子どもにとっても楽しいことなので賛成。
- 4 柔軟に参加できるようにお願いしたい。その学校の予定等もあるので。
- 5 単なる図工の授業と違い、子どもたちが意欲的に参加する姿がみられるので、絶対に、また今後も参加してみたい。
- 6 学校を離れた場所でのワークショップや展示は、子どもたちにとって、楽しく思い出に残った。実施賛成。
- 7 展示の場所が、天寿楽しかなかったのか。交通便がよく他からの客も来やすくできれば。
- 8 一方的に依頼された感がある。参加するかどうかもっと事前にその旨を知らせてほしい。学校はそれなりに忙しいのです。
- 9 その場で、一日に作り終われるような、また大学生も一緒になって作成に関わって作り上げるような

- イベントとしての取り組みはどうか。自由参加で集まった子どもたちで共同作品作り、もしくは、作品の一部を作る。
- 10 主体的参加する意思あり。
 - 11 一学期の最初の段階で提案してほしい。
 - 12 学生や院生によるボランティアをお願いしたい。
 - 13 参加することは意義があり、子どもたちも喜んで参加していた。
 - 14 学期末や他の行事の時期と重なると教育活動に支障がでる。
 - 15 内容、形態としては、今年度の方法でよい。
 - 16 学校で行われない造形活動を楽しめるのでよい。
 - 17 今回のように、やり方(つくり方)材料など、準備されての実施はよい。
 - 18 教育計画があるので今回のように、あまり時間をかけずに取り組み、子どもたちも楽しめるものは参加したい。
 - 19 今回参加させていただき、このような作品の作り方があることを知り、大変参考になりました。
 - 20 自分たちが作った作品が多くの人の目に触れることで、自信をもつことができたようです。
 - 21 作品を作るときに学生ボランティアをお願いしたい。
 - 22 主体的参加の意向はあり。
 - 23 アートプロジェクトの実施についても良いと思う。参加の経験を意欲のある子ども達にさせることは大変意義があると思うので。
 - 24 プロジェクトを行うにあたっては、企画、運営してゆく組織が必要であるが、どのような形がよいか悩む。
 - 25 特別支援グループで企画を煮詰めたり、展示を考えたり展示作業したりするのも良いと思ったが、個々の学校に横の連携がないのが実情であり、中教研の様な枠組みがあるとやりやすいと思った。しかし、校種関係なく参加するスタイルもおもしろいと思うので、その場合は、今回の大学のようなまとめ役が必要となってくる。
 - 26 展示場所や大きさ等を自主的に決定できるようなプロジェクト形式になると良い。
 - 27 造形作家とのコラボレーションなどをもっと取り入れると意欲向上や作品への思いも高まると考える。
 - 28 学校教育と外部の教育力を活用するシステムがあるとよい。
 - 29 プロジェクトの実施は賛成。美術の大切さ、おもしろさ等を世間にしらせていきたい。
 - 30 形態は、校種ごと、区で分けるのも良い。
 - 31 内容は、現代美術だけでなくても良い。アンデパンダン式の展示。
 - 32 市民も参加のかたち。
 - 33 継続することが大切。
 - 34 中学生プランの様な感じでできると他校とのつながりもできてよい。
 - 35 子どもがねり上げていく形がよい。
 - 36 生徒は主体的に取り組んでいた。
 - 37 時間がなく大変だった。生徒にPR不足。
 - 38 今回は振り分けられた感があるが、多くの学校が主体的に参加するにはどうしたら良いか考える必要がある。
 - 39 時間的に制約されている中でプロジェクトに参加することは、それなりの意識の盛り上げ必要。コンセプトをしっかりもち、その賛成者をつのるのがよい。
 - 40 トップダウン式ではなく、下からの盛り上げで出来るとよい。企画から実施までの時間的余裕がほしい。
 - 41 内容は、ある程度核になる人に提案してもらい。それから実施にうつすようにするとよい。
 - 42 主体的に参加したい。主旨を理解した上で参加したい。
 - 43 主旨がよくわからなかった。
 - 44 何が母体で、どういう組織等もよくわからない。

- 45 準備期間及び移動の問題が条件に合えば、参加したい。美術部の活動として取り入れていきたい。
- 46 中学生は、できるならば企画の段階から参加したい。与えられた材料、題材ではもの足りない。
- 47 大学が核として進めることは賛成です。
- 48 新潟市全体より区ごとにやった方がいいのでは。
- 49 学校が忙しい、指導計画の中にはじめから位置づけられないか。
- 50 作品を天寿園で鑑賞して意義深く感じたが、学校現場の実状として指導計画以外の題材に取り組む余裕は全くない。
- 51 絵画教室や造形クラブなど、学校外でなされている任意団体を中心に展開されるのが理想的。
- 52 屋内展示がよい。
- 53 内容について早めに決定し、共通理解した上で参加を募集するべき。
- 54 子どもの発達に無理がなく、気軽にできる制作内容がよい。
- 55 各校園での打ち合わせの時期をもう少し早めるべき。
- 56 実施自体は賛成。主体的参加の気持ちはある。
- 57 機械的な学校への割り振りは避ける。
- 58 組織体制を明確にする。
- 59 普段の取り組みを生かせる方向で実施を考えたい。
- 60 学年の指導内容の中の粘土工作の指導めあてが今回のパラダイスに合わない。学年の指導内容と一致したものであれば、図工指導の一貫として授業の中に取り組める。
- 61 今回の島だけを必要に応じてつくってもらえるなど、臨機応変に対応してもらえるとありがたい。
- 62 大きな会場でいろいろな学校の子どもたちが交流して作品を作る場がほしい。
- 63 実施は、突発的な感が否めない。早め早めに情報を末端の教員まで伝えてほしい。
- 64 様々なアートの形があることを知る上では有効である。
- 65 今回の成果を基にして学校を超えて共に活動する教育活動が求められる。
- 66 現場は多忙を極めている。そうすると参加できる（したくない）教員は多い。プロジェクトの内容や方法を工夫することと場を確保することが必要。
- 67 市内大会の口、美術部の合同の活動を美術館で行えるようにするなどのスタイルをつくり、その形の中で無理せず最小の労力でいいものができるようにする。
- 68 参加できたことは結果的によかった。
- 69 水上に合わせて企画したことはいい試みだった。
- 70 毎年難しい。授業時数の確保に影響が出てくる。
- 71 新しい芸術の見方を養えるよい機会だった。
- 72 アートプロジェクトはとても有意義な事であったので、またあれば参加したい。
- 73 市内中学生が交流する機会がないので今年のような形態が望ましい。
- 74 教師の動きが多かったので、生徒たちの活動がもっと増えると良い。
- 75 主体的に活動に取り組み頑張っていて教育活動としての意義はある。実施は賛成。
- 76 今回は時間が少なく、生徒にもPRする時間などがなかった。計画等は早めにしてほしい。
- 77 学校に振り分けられた感じがある。多くの学校が参加するには、どうしたらよいかを考える必要があると思う。
- 78 水上への参加は主体的な参加ではなかった。学校の多忙さを理解ください。
- 79 美術教育としての「アートプロジェクト」については有効だと思う。賛成。
- 80 長期計画のもと、役割などを明確に実施するとよい。
- 81 どのような内容にするかにもよるが、具体的な方向性をもう少し分かりやすく提示してほしい。
- 82 よい機会なので、市内の全小学校で実施するなど活動を広げてほしい。
- 83 教育課程の編成上、前年度のうちに教えてほしい。
- 84 子どもに体験させてあげてよかった。大学からの新しい提案がとてもよかった。
- 85 子どもたちが作った作品を観にいける時期での開催が望ましい。

- 86 大学生と園児の交流や一緒に作ったものを大学構内で展示するような企画があると楽しい。
- 87 このようなプロジェクトのチャンスを与えられたことは、生徒にとってはラッキーであった。
- 88 直接展示会場まで鑑賞にきた生徒がいなかったのが残念だった。
- 89 小規模校の参加は、準備が大変だった。
- 90 機会があれば、また参加しても良いと考えますが、内容、計画について明確に設定してほしい。
- 91 実施された場所が交通的に不便。
- 92 参加方法としては、学生のフォローがあつて助かった。
- 93 プロジェクトは楽しかった。
- 94 アートプロジェクトへの理解を担任が十分理解していないと無理。アートプロジェクトの教育的意義が広く周知されないとなかなか広まらない。
- 95 美術を専門に関わっている人々がもっと良さを広めないと難しい。中高の美術教師がむしろアートプロジェクトへの理解が薄い様に感じる。
- 96 小中高のつながりがある程度ないと一時的な盛り上がりで終わってしまう。アートプロジェクト自体の可能性は十分意義があることだと思うが。
- 97 教育計画に位置づけるためには、早めの計画が必要。
- 98 制作の時に、担任プラス一緒に技術指導やアドバイスをしながら作ってくれる人がいると楽しく有意義になるのでは。
- 99 打ち合わせの時間をとるのもなかなか難しいような多忙化が現場にはある。
- 100 もう少し早い時期から活動がわかっている必要があった。
- 101 保護者への最大の啓発になり、幼稚園のよいアピールになった。
- 102 様々な人々とかかわりをもってほしいという幼稚園の願いに対して、よい経験であった。
- 103 水十を実施するには無理があった。それでも実施した成果はとても大きい。各地域の広がり、他の企画とのコラボ、新潟の中でももう少し考えられるのではと思う。主体的に生徒が参加していくには、移動、招聘などのバックアップをより強化してほしい。
- 104 大きなものでなくても地に足のついた地道なものを脈々と続けていくのがよい。⇒教委、大学などで、一年中自由に開催する仮想ネット新潟美術館をつくるとか、幼稚園から大学、一般市民でも作品を発表や美術についてのわが広まり、深まるものを載せていけるとよい。ルールは必要だが、ゆるい方がいい。
- 105 学社民の協力体制がとれてない。どこが主導か。
- 106 アートプロジェクトは、イベントになっていて、そこからつながるもの、日々の学びにいきるものという発想がない。人を呼べばいいという大人の発想。子どもが置きよりになっている。
- 107 事前の打ち合わせを細かくする必要がある。事前の打ち合わせと実際が違って困った。
- 108 作品のテーマは大きくあるものの具体的な制作手順や素材等が全く見えないままだったので、直前になるまでわからず保育に支障をきたした。
- 109 このようなアンケート形式で3つ以上は記入は非常に難しい。
- 110 感謝している。今回のことを次回にいかして改善できればよいと思う。
- 111 教科書以外のいろいろな活動ができるのでよい。
- 112 時間の件、道具、材料など費用の点、指導者の有無が参加に大きく関係してくる。
- 113 もっと市民の注目が集まり盛り上がると参加の意欲がわく。(人を集めるためのイベント)
- 114 学生のブランチした造形活動にそって、系買うに合わせて活動したが、学生も子どもたちと実際に活動してもらい人と人との関わりで活動の輪を広げたい。
- 115 展示の仕方について 龍がぐるぐる巻きつけてあったこと。
- 116 会場が広くて1つのイメージには感じられなかった。
- 117 会場図に園名や校名を入れたものがあると見つけやすい。
- 118 主体的な参加の意向があったわけではないが、協力した。時間的には苦しい中で子ども達と活動した。

- 119 今回の制作は、子どもの実体には合わず、達成感は得られなかった。
- 120 事前打ち合わせがどんな程度のものになったらよかったのかは不明だが「何をつかって何をどう表現する」ということが分からず、下受けた仕事をしたという感じだった。
- 121 大學生の対応はまじめで真剣さが感じられた。
- 122 生徒ともども良い経験をさせていただいた。
- 123 もっとたくさんの学校が参加できると良い。
- 124 これからどのように芸術祭が展開されていくか気になるところ、今年やって終わりというのも残念である。
- 125 夏休みに実施されると参加しやすい。
- 126 土曜日にアート会議は参加しにくい。平日も無理だが、生徒が、各学校で考えたことをアイデアコンテストなどで選ぶ形だと最初から参加しやすい。
- 127 作品に使う材料をある程度、業者に加工してもらえると仕上げりもきれいに生徒も楽しく作品づくりができる。
- 128 実施するのであれば、作品制作を学校に依頼するのではなく、企画運営の学生と協同で作品を作るなどがよい。
- 129 どの時期にどのような形でどんな活動をするのか事前に計画が立っていると参加しやすい。
- 130 設置された作品を見て回ったり、学生が用意した造形ワークショップに参加したりすることができる機会があったことはよかった。
- 131 主体的参加を希望。学校の実情に合わせて希望制がよい。
- 132 実施賛成。保護者にとって何よりも自分の子どもの作品を見るのが楽しみであることから。(子どもも保護者も観に行っていた。)
- 133 今年のように各地区ブロックから参加を募る方向でよい。
- 134 大学の学生だけでは、学校の児童の実態がわからないところが多いのではないかと、現職の単員教諭との打ち合わせの機会が1回でもあるとよい。
- 135 展示方法では、もっと作品を大切にしてほしいとの保護者の声があった。(レインボーが地面だったり、木にぐるぐる)
- 136 全体案が早期に周知、理解されるべきであった。
- 137 芸術祭や西区 DE アートなど今後も引き続き実施するべきである。
- 138 新潟市新潟県が今後も素晴らしい街、地域になるように美を求める活動を増やしていくべきである。
- 139 今回のような取り組みならば、積極的に参加したい。
- 140 大学などの研究者による提案的な取り組みになると現場は勉強になる。
- 141 年間の指導計画があり、その中に位置づけることが難しかった、カリキュラム化をどうするか。

謝 辞

今回、決して楽ではないアンケートに協力して下さった教員の皆様にお礼申し上げます。また、アンケート送付や [附録] のデータ起こしをしてくれた学生のみなさん、ありがとうございました。